ミース・ファン・デル・ローエのモンタージュ表現とその特質に関する研究

A RESEARCH OF CHARACTERS OF MIES VAN DER ROHE'S MONTAGE

岩田 章吾*, 足立 裕司**
Shogo IWATA and Hiroshi ADACHI

In this research, we analyzed Mies van der Rohe's montages on following aspects, in order to understand the characters of each montage expression and categorize them on these characters. Montages are analyzed on following 2 aspects, and in order to understand the role of montage, we also analyzed Mies's hand-drawings on same aspects. Because almost all montage was based on the perspective, we mainly research them.

1. The character of the projects:
The character of the projects for which montages was drawn was analyzed on its program, site, the year of production, architectural typology, and so on.
2. The character of the montage:
Montages are categorized on the character of them, and we analyze the common character of each category.
 - (1) The character of the perspective drawing
 - (2) The character of the montages technique

Keywords : Mies van der Rohe, Montage, Drawing, Modernism

ミース・ファン・デル・ローエ、モンタージュ、ドローイング、モダニズム

はじめに

ルードヴィヒ・ミース・ファン・デル・ローエ (Ludwig Mies van der Rohe 1886-1969. 以下ミースと記す) は建築家としての出発点から晩年にいたるまでモンタージュ表現を用いた作品 (以下モンタージュと記す) を数多く作成し、その多くが彼の実施された建築プロジェクトと同様に展覧会、作品集において展示、掲載されている。これらのモンタージュは彼の空間概念を表出した作品として最も成功していると評価されており¹、またミースの空間を「モンタージュ的」と論じる事例もいくつか見受けられる²。しかし、ミースの作品理解においてこれらのモンタージュは全体として言及されることがほとんどであり、個々のモンタージュの持つ特質の分析は十分に行われているとはいえないのが現状である。

ミースに関する既往の研究のうち、モンタージュを一つの独立した表現媒体として分析した研究³は少なく、主要なものとしては近年催されたミースの回顧展の図録における、アンドレス・レピック (Andres Lepik) によるモンタージュ手法の分析⁴がある程度である。レピックは、モンタージュの分析からミースのセルフ・プロモーション戦略を読み取ろうとしている。しかし、レピックはドイツ期のモンタージュ、特に初期のビスマルク記念碑とフリードリッヒ街の高層建築のモンタージュについては詳細な検討を行っているものの、そ

れ以外のモンタージュについては、概括的な分析は行っていない。そのため、個々のモンタージュの表現手法に注目した本研究はレピックの研究を補完する⁵のものであると考える。なお、本編は次に続く、「ミースのインテリア透視図のモンタージュにみる内外空間の関係に関する研究」の前段階として位置づけられる。

1 章 研究対象と方法

ミースのモンタージュにはコラージュやフォトモンタージュなどの呼称がさまざまな研究者によって用いられているが、確定した呼称は存在しない⁶。本研究では、写真、ペニヤ、紙などの素材を画面に貼り付けることで作成された作品をモンタージュと総称する。これらのモンタージュをさまざまな見地から検討することによって分類を行い、分類ごとの特質を抽出する。なお本研究ではモンタージュに近似する手法として、透視図法によるハンドドローイングを適宜、比較の対象としている⁷。

(1) 研究資料

研究資料を現在最も充実したドローイング集であるニューヨーク近代美術館の『ミース・ファン・デル・ローエ・アーカイブ (Mies van der Rohe Archive) vol. 1-20』に主要な作品集⁸を加え、これらに掲載された総数 56 点のモンタージュ⁹を研究対象とする。なお対象中

* 神戸大学大学院自然科学研究科 大学院生・工修

Graduate Student, Graduate School of Science and Technology, Kobe University, M. Eng.

** 神戸大学大学院自然科学研究科 教授・博士(工学)

Prof., Graduate School of Science and Technology, Kobe University, Dr. Eng.

1947年の「劇場」における立面図のモンタージュ2点と、外部空間を描いた外構透視図のモンタージュ2点以外の52点は全て透視図法による建築のモンタージュであり、本研究の主な研究対象とする。

(2) 研究方法

本研究は以下の二つの特質に注目し、これらの特質からモンタージュを分類し、モンタージュ表現とそれが採用されたプロジェクトの特質との関係を分析する。

i) モンタージュが作成されたプロジェクトの特質

ここではモンタージュが作成されたプロジェクトの概要（制作年¹⁰、立地条件、実施の有無、用途、建築の形態的特質などの項目）について考察する。また、これらの分析において、モンタージュの位置づけを考察する材料として、ハンドドローイングにおいても同様の分析を行う。

ii) モンタージュ表現の特質

ここではモンタージュの図法や手法について調査し、共通する特質を抽出し、下記の2項に注目して分析する。

①透視図法の特質：

ミースのモンタージュの図法を分析する。その大半が透視図法によって描かれているため、対象となる空間の内外の区別、消点の位置（歩行者の視点で描かれた外観透視図と鳥瞰透視図）、消点数、透視図としての整合性を検討する。

②モンタージュ表現の特質：

モンタージュされた素材の種別、素材同士およびモンタージュ素材とその地となる画面との関係を分析する。

2章 研究の前提

個々のモンタージュの分析を行う前に研究の前提として次の二点を確認する。一つはミースのモンタージュ手法の採用とそれがベルリンダダから影響を受けたものであるという指摘についての検討であり、もう一つは、モンタージュ手法のドローイングへの適用がミースの意図を反映したものであるかについての検討である。

(1) ミースのモンタージュとベルリンダダとの影響関係について

ミースのモンタージュ手法の使用を当時交流¹¹のあったベルリンダダのメンバーからの影響とする指摘が存在する¹²。ミースの最初のモンタージュは1910年のビスマルク記念碑の設計競技のために作成されている。ただし周辺写真に建築のドローイングを重ね合わせる手法は1900年ごろから開始されており、ミースが最初にモンタージュを作成した1910年にはすでに建築の領域では一般的な手法であったと考えられる¹³。一方、ベルリンダダのメンバーが写真を加工したドローイングを「モンタージュ」「フォトモンタージュ」と名づけ、自らの表現手法としたのは1916年から1918年の間といわれている¹⁴。つまり、写真を操作して作品を作り上げるという技術的側面だけ見れば、ダダからミースへの影響関係は成立しない。

ベルリンダダのモンタージュの持つ革新性はこのような技術的側面ではなく、絵画の形式としての革新性であると考えられる。ダダの作品に限らず、当時の絵画の領域におけるモンタージュ手法の特質は、断片の非透視図的な配置によるルネッサンス以降の絵画のもつ「イメージの再現」という特質の破壊や、本来の場所から切り取られた素材を再配置することによる、絵画としての統一性の破壊¹⁵などが指摘されている。しかしミースのモンタージュの大半が透視図

として描かれていることはひとつの顕著な特質といえ、ダダのモンタージュの非透視図的な特質とは合致しない。ただし、ミースのモンタージュが従来の透視図のもつ再現的特質の枠内で作成されていたかについては個別に検討する必要があると考えられる。しかし、ミースやベルリンダダのメンバーによる言説等もない現時点では、両者の影響関係の検証は不可能であると考えられる。

(2) モンタージュ手法の適用とミースの意図についての検討

i) ドイツ期におけるモンタージュ手法の採用について

ベルリン期のモンタージュが作成されたプロジェクトの大半が設計競技であった（表1参照）。そのため、これらのモンタージュは要求されて作成¹⁶されたものであり、ミースの意図を反映したものではない可能性が指摘できる。最初にモンタージュ手法が採用された1910年のビスマルク記念碑の設計競技案は上位26人に選ばれた¹⁷ものの、当時のミースがこのモンタージュを展覧会や雑誌などに発表したという記録は見出せなかった¹⁸。一方、フリードリッヒ街の高層建築のモンタージュは実際には展覧会用に設計競技後に作成されたと考えられる¹⁹。また、このモンタージュは1924年6月の『G』3号に挿絵として採用されている²⁰。アダムビル(1928)とシュツットガルトのバンクビルディング計画(1928)は設計競技であるが、そのモンタージュは1929年のアルトゥール・コルン (Arthur Korn) の『Glas im Bau und als Gebrauchsgegenstand』に掲載されている²¹。また、アレキサンダー広場再開発の鳥瞰モンタージュは1929年2月の『Das Neue Berlin』に発表されている²²。1920年代において、ミースは自らの建築家としてのイメージを確立するために非常に注意深く行動していたといわれており²³、もしモンタージュによるドローイングがミースにとって自らの建築理念を表現する上で望ましい手段でなかったとすれば別途ハンドドローイングを作成していたと考えられる。これらのことからドイツ期においてもミースはモンタージュを表現上の重要な手段として位置づけていたと考えられる。

ii) アメリカ期におけるモンタージュ手法の採用について

アメリカ期においては、モンタージュが設計競技の提出物として作成されることは無く、その一方で実施を前提としない企画のプロジェクトにおいてモンタージュが多く作成されている。ミースがI. I. T. のカリキュラムにおいてモンタージュ手法を建築イメージの伝達手段として積極的に活用しており、これを発展させる形で自らのモンタージュを作成していたことがわかっている²⁴。このことから、アメリカ期においてミースはモンタージュを自らの建築イメージを表現する適切な表現手段であると考えていたと考えられる。

3章 モンタージュが作成されたプロジェクトの特質

本章では1章の研究手法における「モンタージュが作成されたプロジェクトの特質」の検討を行う。

モンタージュとドローイングが作成されたプロジェクト(建築計画)の特質を表1, 2に抽出した。表1の通り52点(表中c)の透視図モンタージュ中22点(表中a)が建築を外部から描いたモンタージュ(外部モンタージュ)であり、30点(表中b)が建築の内部空間を描いたモンタージュ(内観モンタージュ)である。ドイツ期に作成されたモンタージュ15点は全て外部モンタージュであるが、アメリカ期に作成された建築透視図モンタージュ37点のうち外部モンタージュは7点のみであり、その大半が内観モンタージュという際立った対比

を見せている。また、ドイツ期の外部モンタージュのうち14点が外観モンタージュであり、鳥瞰モンタージュは1点のみである。一方、アメリカ期においては、外観モンタージュは1点のみである。前述のようにドイツ期のモンタージュの大半が、パブリシティに利用されているのに対して、アメリカ期の1点のモンタージュは、作品集に掲載されていないだけでなく、プロジェクトの存在自体がほとんどの研究書において言及されていない。これらのことからドイツ期とアメリカ期では、ミースにモンタージュについての何らかの認識の変化があった推察される。また、外部モンタージュと内観モンタージュがともに作成されたプロジェクトは24プロジェクト中、唯一「コンベンションホール」のみであり、外部モンタージュを作成されたプロジェクトと、内観モンタージュを作成されたプロジェクトの大半が一致しないことから、内観モンタージュと外部モンタージュは作成されたプロジェクトの特質が異なる可能性が推察される。

(1) 実施／アンビルド

ミースによる全プロジェクト²⁵、189件中モンタージュが作成されたのは24件(13%) (建築透視図のモンタージュのみでは22件(12%))、ハンドドローイングが作成されたのは44件(23%) (建築透視図のみでは37件(20%))であった。ドイツ期の全55プロジェクト(そのうち32件、58%がアンビルドプロジェクト)中モンタージュが作成されたのは8件で、すべてアンビルドプロジェクトであった(100%)。アメリカ期の全プロジェクト134件(そのうち75件、56%がアンビルドプロジェクト)中モンタージュが作成されたのは16件。この内11件がアンビルドプロジェクト(69%)である。一方、ハンドドローイングにおいてはドイツ期では作成されたプロジェクト23件中18件がアンビルドプロジェクト(78%)、アメリカ期では21件中6件がアンビルドプロジェクト(29%)となっている。ドイツ期のモンタージュが作成されたプロジェクトがアンビルドプロジェクトである比率は、ドイツ期のプロジェクト全体におけるアンビルドプロジェクトの比率と比べても際立っている。アメリカ期においても、モンタージュが作成されたプロジェクトにおけるアンビルドプロジェクトの比率は、プロジェクト全体におけるアンビルドプロジェクトの比率に比べるとドイツ期ほどではないがやはり高い。ドイツ期の比率の高さは前述のようにモンタージュが作成されたプロジェクトの大半が設計競技のプロジェクトであったためであると考えられる。一方、アメリカ期では、モンタージュが作成されたプロジェクトに設計競技はないが、小都市の美術館や、コンサートホールなど、企画としての計画の存在がその理由の一部と考えられる。

(2) 立地・用途・建築の特質

立地や用途に関しては外部(外観+鳥瞰)モンタージュと内観モンタージュでは異なる特質が見出せるため以下では個別に分析を行う。

i) 外部モンタージュ

外部モンタージュが作成されたプロジェクトは、初期のビスマルク記念碑を除く全てが都市部(表1における都心部とI.I.T.を含む)のプロジェクトである。ドイツ期のモンタージュのうち6プロジェクトは高層建築であり、ドイツ期に計画された高層建築のプロジェクト9件の67%を占めている。一方、アメリカ期では外部モンタージュは5プロジェクトで作成されているが、都心部の高層建築のプロジェクトは3件であり、アメリカ期に計画された高層建築のプロジェクト33件の9%しか占めていない。

表1: モンタージュが作成されたプロジェクトの特質 (○印は該当を示す)

プロジェクト名称		制作年	モンタージュ数				実施/アンビルド		立地				用途				建築の特質																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																												
			外部透視図	鳥瞰透視図	内観透視図	外構透視図	立面図	実施	設計競技	企画	都心部	郊外	I.T.	住宅	商業	文化		教育	その他																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																										
ドイツ期	1	Bismarck Monument	1910	2					○				○				○																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																												

表2: モンタージュ、ハンドドローイングが作成されたプロジェクトの特質

		実施/アンビルド				立地				用途				形態				
		事例数	実施	アンビルド	設計競技	企画	都心	都市	郊外	I I T	その他・不明	住宅	商業	文化	教育	その他	高層建築	大空間
全体	全プロジェクト	189	82	107	13	10	28	44	53	39	25	76	38	19	40	16	42	10
	モンタージュが作成されたプロジェクト	24	5	11	0	5	11	8	2	1	0	5	9	8	1	1	11	0
	ドローイングが作成されたプロジェクト	44	20	24	7	7	7	8	20	9		17	8	8	9	2	9	0
	外観モンタージュ	9	2	10	6	1	8	2	1	1	0	2	7	2	1	0	9	0
	鳥瞰モンタージュ	5	2	3	1	1	2	2	0	1	0	2	1	1	1	0	3	0
	外観ドローイング	27	14	13	5	1	4	4	12	8	0	12	4	3	8	1	5	3
	鳥瞰ドローイング	4	3	1	0	0	1	0	2	1	0	3	0	0	1	0	1	0
	内観モンタージュ	9	2	7	0	1	1	6	1	0	1	3	1	5	0	0	1	0
	内観ドローイング	13	2	11	4	1	0	5	6	2	0	5	1	4	2	1	0	1
	ドイツ期全プロジェクト	55	23	32	12	4	9	8	33	0	5	34	10	8	0	3	9	7
ドイツ期	モンタージュが作成されたプロジェクト	8	0	8	6	1	7	0	1	0	0	6	1	0	1	6	0	7
	ドローイングが作成されたプロジェクト	23	5	18	7	4	4	4	15	0	0	13	5	4	0	1	5	0
	外観モンタージュ	8	0	8	6	0	7	0	1	0	0	7	1	0	0	0	7	0
	鳥瞰モンタージュ	1	0	1	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1	0
	外観ドローイング	15	3	12	5	0	3	1	12	0	0	10	4	1	0	1	4	0
	鳥瞰ドローイング	2	1	1	0	0	0	0	2	0	0	2	0	0	0	0	0	0
	内観モンタージュ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	内観ドローイング	8	1	7	4	0	3	5	0	0	0	4	0	3	0	1	0	0
	アメリカ期全プロジェクト	134	59	75	1	6	19	36	20	39	20	42	28	11	40	13	33	1
	モンタージュが作成されたプロジェクト	16	5	11	0	5	4	8	1	1	0	5	3	7	1	0	5	0
アメリカ期	ドローイングが作成されたプロジェクト	21	15	6	0	2	3	4	5	9	0	4	3	4	9	1	4	0
	外観モンタージュ	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0
	鳥瞰モンタージュ	4	2	2	0	1	1	2	0	1	0	2	0	1	1	0	2	0
	外観ドローイング	12	11	1	0	1	1	3	0	8	0	2	0	2	8	0	1	0
	鳥瞰ドローイング	2	2	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0	1	0	1	0
	内観モンタージュ	9	2	7	0	1	1	6	1	0	1	3	1	5	0	0	1	0
内観ドローイング	5	1	4	0	1	0	2	1	2	0	1	1	1	2	0	0	0	

* 一つのプロジェクトにおいていくつかの表現形式で表現されているため、各表現形式の事例数の合計とモンタージュ/ドローイングが作成されたプロジェクト数は必ずしも一致しない

ハンドドローイングにおいては、ドイツ期では外部透視図が描かれているプロジェクトのうち、都心部の高層建築のプロジェクトは3プロジェクトのみであり、大半が郊外の住宅(16件中10件)となっており、モンタージュと補完的關係を形成している。アメリカ期では、12プロジェクトのために外観ドローイングが作成され、2プ

プロジェクトのために鳥瞰ドローイングが作成されている。外部透視図が作成されたプロジェクトは全て都心部の規模の大きな建築であるが、その大半が I. I. T. の建物であり高層建築は 2 件のみである。

ii) 内観モニタージュ

内観モニタージュはアメリカ期の 9 件のプロジェクトで作成されている。その立地、用途ともに多様になっているが、9 件のプロジェクトのうち高層建築は 1 件のみである。残りの 8 件は規模の大小はあっても低層で、そのうち 6 件が大空間建築である。ハンドドローイングによる内部空間の透視図はドイツ期では 8 プロジェクト、アメリカでは 5 プロジェクトのために作成されている。ドイツ期では郊外の住宅が半分を占めるがアメリカ期では特定の立地条件、用途、建築形態といった共通する特質は見出せない。

4 章 外部モニタージュの特質とその変遷

本章では 1 章の研究方法における「モニタージュ表現の特質」の外部(外観+鳥瞰)モニタージュにおける検討を行う。

外部モニタージュのプロジェクト概要、透視図形式および、モニタージュ形式の特質を表 3 に抽出した。

(1) モニタージュの特質

①透視図法の特質

ドイツ期に作成された外部モニタージュの 15 点のうち 14 点が外観モニタージュであり、鳥瞰モニタージュはアレキサンダー広場の再開発計画のための 1 点のみである。一方、アメリカ期においては、7 点中 6 点が鳥瞰モニタージュで描かれており、外観モニタージュはシーグラムビルディング・シカゴの 1 点のみである。外部モニタージュはすべて、画面の地(背景)は敷地の周辺写真であり、そこに図として模型写真またはドローイングがモニタージュされている。敷地の写真は透視図とみた場合、全てが二消点透視図法、3 消点透視図法の形式をとっている。貼り付けられた素材は、模型写真、ドローイングのいずれにおいても、背景の写真の空間的枠組みに則って二消点透視図法または 3 消点透視図法的に表現されており、一つの透視図としてその空間表現に曖昧さは見出せない。

②モニタージュ表現の特質

外部モニタージュのモニタージュ表現には作成年に応じて差異が見られ、固定した手法は見出せない。作成された 15 点の外部モニタージュのうち 8 点を占め、手法的にも一貫している 4 つのプロジェクト、アレキサンダー広場の再開発計画、アダムビル、バンクビルディング計画、フリードリッヒ街のオフィスビル II のモニタージュはわずか 2 年、1928—1929 年の間に作成されているだけである。

ビスマルク記念碑のモニタージュは背景もモニタージュ素材とともに写真であり、両者がひとつのイメージを形成するように背景の画面にドローイングを加えるなどの調整を行っていることから、背景と素材間での表情の違いはそれほど大きなものとはなっていない。

フリードリッヒ街の高層建築は、背景の写真とドローイングの建築との質感の違いの調整を行っていないものと行っているものが存在する(図 1)。調整を行っていないモニタージュは初期案と考えられ、これをベースに周辺街区にドローイングを重ねたモニタージュおよびハンドドローイングが作成されたと考えられる²⁶。最終版とされるハンドドローイングにおいては初期案にみられた既存の街並みとガラスのカーテンウォールの対比はドローイングにおける明暗の

表 3：外部モニタージュの特質

プロジェクト	プロジェクト概要				透視図の形式		モニタージュの形式		
	年	立地	用途	建築の特質 高層建築 大空間建築	モニタージュ番号	種類 外観 鳥瞰	消点の数	背景写真	透視図の形式
ドイツ期	Bismarck Monument	1910	S B		1	○	2	○	行っている
	Friedrichstrasse Skyscraper	1921	M C	○	2	○	2	○	
	Glass Skyscraper	1922	M C	○	3	○	2	○	行っている
	Traffic Tower	1924	M X		1	○	2	○	
	Alexanderplatz Remodeling	1928	M C	○	1	○	3	○	
	Adam Building	1928	M C	○	2	○	2	○	
	Bank Building Project	1928	M C	○	1	○	2	○	
	Friedrichstrasse Office Building II	1929	M C	○	2	○	2	○	
	IIT Master Plan, General Studies	1939-41	U E		1	○	2	○	
	Convention Hall	1952-54	U B		2	○	2	○	
アメリカ期	Pavilion Apartments and Town Houses	1955-63	U H	○	1	○	2	○	
	Apartment Buildings, Battery Park	1957	M H	○	1	○	2	○	
	Seagram Building	1957	M C	○	2	○	2	○	
					1	○	2	○	

凡例：
立地：M(周辺が過密な都心) U(周辺環境が都市) S(周辺環境が郊外)
用途：H(住居) C(商業) B(文化) E(教育) X(その他)

対比に置き換えられている。その結果、新旧の対比はより強調される一方で、一つの絵画的表現としての統一性も高められている。

1922—24 年に作成された 2 点の外観モニタージュは背景と素材の間の表情の差異は調整されていないが、模型写真がモニタージュされており、背景と素材の表情の差による画面上の効果といったモニタージュ表現の特質は弱められている。

図 1：フリードリッヒ街の高層建築

外部モニタージュにおいて、ほぼ共通の手法によって作成されているのは 1928 年—1929 年に作成された 4 つのプロジェクトのための 7 つの外観モニタージュである(図 2)。これらのモニタージュに共通する特質はハンドドローイングによるガラスカーテンウォールと街並写真の、デザイン的にも表現の質感においても異なるものの並置である。このことにより、フリードリッヒ街の高層建築のハンドドローイングのような明暗に二重化された対比とは異なる対比が生み出されている。ただし、ミースは建物の外観を質感とスケール感を与えるように描いているため貼り付けられたドローイングと背景の間の表現上の差異は透視図としての再現的な特質を揺るがすようなものとはなっていない。一方、ドイツ期に唯一作成された、アレキサンダー広場の鳥瞰モニタージュにおいては、計画された建築が外観モニタージュ以上に表情のない抽象的なボリュームとして表現され、敷地はきわめて単純な空白として表現されており、外観モニタージュより大きな対比を形成している(図 3)。

1929 年以降、現在確認されている外観モニタージュはアメリカ期に作成されたシーグラムビルディング・シカゴ²⁷(図 4)のモニタージュのみである。このモニタージュは背景写真に模型写真がモニタージュされており、その表現は周辺と建物の対比を強調するものではなく、1928 年—1929 年のモニタージュとは大きく異なっている。一方、アメリカ期には鳥瞰モニタージュが 6 点作成されているが、

これらに共通する手法は見出せずアレキサンダー広場の再開発と同様の抽象化されたボリュームと単純な空白として表現された敷地という表現は、アメリカ期では、I.I.T.キャンパスの配置計画(図6)とコンベンションセンターの鳥瞰モンタージュに見出せるのみである。

図2：バンクビルディング計画

図3：アレキサンダー広場の再開発計画

(2) 考察：モンタージュによって表現される建築と周辺の関係

外部モンタージュの手法は制作年ごとに变化しており、共通する特質を見出すのは困難である。しかし、全てのモンタージュが写真为背景としており、モンタージュされた要素は背景の写真が表現する空間的広がり、スケール感を逸脱するようには配置されていない。そのため、透視図としての視覚的再現性はある程度維持されているということができる。

最初に作成されたビスマルク記念碑のモンタージュを除き、モンタージュ手法が採用されるプロジェクトはドイツ期もアメリカ期もその大半は都市部の大規模建築である点は共通している。一方、ハンドドローイングは、都市部の大規模建築の表現においては、ドイツ期では、4プロジェクト(都心部3プロジェクト、都市部1プロジェクト)のための7点のドローイングが作成されているが、このうち、周辺の街区が表現されているものは3点のみである。また、アメリカ期では30点の外部透視図のドローイングが作成されたが、そのうちの24点がI.I.T.の施設であり、建物は単独か、I.I.T.内の建物とともに描かれており、敷地外の街並みは描かれていない。また、残りのドローイングにおいても周辺の街区が描かれたものはわずかに2点しか存在しない。このことから、ミースは計画された建築とその周辺の都市との関係を表現する手段として外部モンタージュを使用していたと考えられる。

計画された建築とその周辺の描き方においてはドイツ期とアメリカ期では以下のような相違が見出せる。ドイツ期においては外観モンタージュで表現された都心部の高層建築は常に全体像としてではなく、街並みの一部として、つまり周辺建物に切り取られた部分だけが表現されている(図2)ことが一つの表現上の特質といえる。一方、アメリカ期に唯一作成された外観モンタージュにおいて、計画された建物は外観が周辺建物に切り取られることは無く、街並みから切り離されて、独立した全体像として表現されている(図4)。アメリカ期においてハンドドローイングによって表現された都市部の大規模な建築の大半がI.I.T.のプロジェクトであり、その表現には敷地外の周辺建物は表現されていない。また、それ以外の都心部の高層建築のドローイングにおいても外観モンタージュと同様にその外観が敷地の周辺建物に切り取られること無く建物の全体像が表現されている(図5)。この表現における変遷は、表現意図の変化以上にミースの作風の変化や、ドイツとアメリカの都市構造の相違などに由来すると考えられる。しかし、このような外的要因が、アメリカ期では外部モンタージュが作成されなくなった一因であるならば、ドイツ期の外部モンタージュの表現である都市の街並みの一部に自らの建築を組み込むことによる周辺環境との対比的関係の表現がこれらのモ

ンタージュにおける表現意図であったと推察される。

図4：シーグラムビルディング

図5：エスプラナードビル計画、図6：I.I.T.計画

5章 内観モンタージュの特質とその変遷

本章では1章の研究手法における「モンタージュ表現の特質」の内観モンタージュにおける検討を行う。

内観モンタージュの透視図法、モンタージュの形式と作成されたプロジェクトの建築の特質を表4にリスト化した。また、建築の特質においては描かれた内部空間の特質をより詳細に分析するために、ミースの空間の特質に関する論述からキーワードとして、「流動的空間」「単一空間 (unitary space)」「ユニバーサルスペース」を、空間の特質に関連する要素として「フリースタANDINGウォール」を抽出した²⁸。このうち、ユニバーサルスペースはミース理解において重要な概念であるものの、多義的に使用されており空間形態としては流動的空間、単一空間などと重なり合う部分もあるためここではとりあえず除外し、残りの3項目について描かれた内部空間のうち該当する項目をリスト化した。また、内部空間の表現におけるドイツ期とアメリカ期の関係を理解するために、表5に内観透視図のハンドドローイングにおける同様の特質についてリスト化した。

内観モンタージュは次に述べるようにA,Bの二つに分類が可能である。つまり、内観モンタージュは内部空間の大きな枠組みを表現する手法が、無地のイラストレーションボードに描かれた単線による透視図による内観モンタージュAと(図7)、建築写真または模型写真による内観モンタージュB(図8)に分類可能である。これは要素がモンタージュされる画面の「地」(背景)となる部分が無地のイラストレーションボードに描かれた単線ドローイングであるか、写真であるかによる分類である。前者は内観モンタージュの大半を占める25点作成されており、後者は5点のみとなっている。この二種類のモンタージュはいくつかの点において異なる特質を有しているため、それぞれの特質を個別に分析する。

図7：内観モンタージュA

図8：内観モンタージュB

(1) モンタージュ表現の特質

①透視図法の特質

i) 内観モンタージュA

内観モンタージュの大半を占める内観モンタージュAはその背景が単線で描かれた透視図であり、25点が作成されている。これらのモンタージュのうち透視図法として明らかに不整合なものは2点²⁹だけである。また25点中24点が一点透視図法で描かれており、二点透視図法で描かれたものは1点しか存在しない。ドイツ期に作成された単線による内観透視図10点のうち3点は二点透視図法で

表 4: 内観モンタージュの特質

プロジェクト	プロジェクト概要		建築的特質				透視図の形式				モンタージュの形式			
	制作年	用途	高層建築	大空間建築	流動的空間	単一空間	透視図として内部空間の透視図を示すもの (モンタージュ画面の地(背景))	透視図として内部空間の透視図を示すもの (モンタージュ画面の地(背景))	透視図として内部空間の透視図を示すもの (モンタージュ画面の地(背景))	透視図として内部空間の透視図を示すもの (モンタージュ画面の地(背景))	透視図として内部空間の透視図を示すもの (モンタージュ画面の地(背景))	透視図として内部空間の透視図を示すもの (モンタージュ画面の地(背景))	透視図として内部空間の透視図を示すもの (モンタージュ画面の地(背景))	透視図として内部空間の透視図を示すもの (モンタージュ画面の地(背景))
Court Houses	1930	H					1	1						
							2	1						
							3	1						
							4	1						
							5	2						
							6	1						
							7	1						
							8	1						
							9	1						
Resor House	1937-38	H					1	1						
							2	1						
							3	1						
							4	1						
							5	1						
							6	1						
							7	1						
							8	1						
							9	1						
Museum for a Small City	1942	B					1	1						
							2	1						
							3	1						
							4	1						
							5	1						
Concert Hall	1942	B					1	2						
							2	2						
Apartment Building, 880/880 Lake Shore Drive	1948-51	H					1	1						
Convention Hall	1952-54	B					1	2						
							2	2						
Ron Bacardi y Compania, S.A. Administration Building	1957-60	C					1	1						
							2	1						
George Schaefer Museum	1960-63	B					1	1						
							2	1						
New National Gallery	1962-68	B					1	1						
							2	1						

凡例
用途: H (住居) C (商業) B (文化) E (教育) X (その他)
消点の数: ☆ (1消点のみに描かれているものの透視図としては不整合である)
無地のイラストレーション・ボード・単線による透視 ☆ (単線透視図が描かれていない)
外部空間の表現: ○ (外部空間が表現されている) ☆ (開口部の前に壁があり外部が見えない)
配置された素材: △ (画面に大して要素が平行に配置されている) × (外部に開かれた開口部なし)
△ (画面に対して要素が垂直、またはその角度に配置されている)

表 5: 内観透視図のハンドドローイングの特質

プロジェクト名称	プロジェクト概要		建築的特質				透視図の形式				外部空間の表現
	制作年	用途	高層建築	大空間建築	流動的空間	単一空間	透視図として内部空間の透視図を示すもの (透視図による透視図)	透視図として内部空間の透視図を示すもの (透視図による透視図)	透視図として内部空間の透視図を示すもの (透視図による透視図)	透視図として内部空間の透視図を示すもの (透視図による透視図)	
German Pavilion Barcelona	1928	B					1	1			○
Tugendhat House	1928	H					1	1			△
Krefeld Golf Club	1930	X					1	1			○
War Memorial	1930	B					1	1			○
Hanke House Addition	1930	H					1	1			○
Gericke House	1932	H					1	1			○
German Pavilion International Exposition, Brussels	1934	B					1	1			○
Huthe House and Huthe-related studies	1935	H					1	1			○
Resor House	1937	H					1	1			○
Illit Library and Administration Building	1944-45	E					1	1			○
Illit Field House	1945	E					1	1			○
Gymnasium, Natatorium	1952	B					1	1			○
Convention Hall	1952	B					1	1			○
Ron Bacardi y Compania, S.A. Administration Building	1957-60	C					1	1			○

凡例
外部空間の表現: ○ (外部空間が表現されている) × (外部に開かれた開口部が無)
△ (開口部はあるが外部空間は描かれていない)

あり、このことから内観モンタージュ A の特異性が明らかになっている。一消点透視図法の透視図は一般的に奥行きを強調するのに適した手法であるといわれている³⁰が、同時に、一消点透視図法で画面に平行に要素を配置した場合、要素の形状は消点との位置関係に影響を受けないという特質も有している(図 7)。一消点透視図法のモンタージュのうち、素材がこのように配置されているものは、24 点中 18 点と 75% を占めている。

ii) 内観モンタージュ B

内観モンタージュ B においては、内部空間の透視図の枠組みは背景となる写真によって決まるが、5 点中一消点透視図法で描かれているものはニューナショナルギャラリーの 1 点のみである。また、その空間表現は内観モンタージュ A のように輪郭線のみで示される

のではなく、写真によって面的に空間的広がりや奥行きが表現されている点がこれらのモンタージュの特質といえるであろう。

②モンタージュ表現の特質

i) 内観モンタージュ A

内観モンタージュの大半を占める内観モンタージュ A は、ハンドドローイングで描かれた内部空間の透視図に絵画・彫刻・風景の写真、ベニヤや大理石の写真などがモンタージュされている。すべてのモンタージュが外部に開かれたフルハイトの窓を持ち、外部の風景はハンドドローイングや写真によって表現されている。

ベニヤ、大理石の写真などのモンタージュ素材はフリースタANDINGウォールとして配置されているが、モンタージュされた要素は素材の小口が表現されておらず、厚みのない矩形として表現されている。絵画はニューナショナルギャラリーの一例をのぞくと、壁にかけられることはなく、自立した壁として表現されるか宙に浮いた存在のように描かれている。また、絵画の多くが実際の作品の大きさよりはるかに大きく拡大されており、ブラックの絵画にいたっては、拡大された断片が配置されている(図 9)。これらのモンタージュ素材は透視図内での前後関係などによって奥行き感などの表情の調整が加えられることなく、そのまま透視図に配置されている。背景より明らかに豊かな表情を持った素材が配置され、これらの素材が画面内での前後関係に関係なく視覚的に浮き上がって見えるために、内観モンタージュ A は一つの空間表現としてみた場合、ハンドドローイングの透視図と比べて透視図が描き出す空間の奥行き関係が曖昧になっている³¹。また素材が画面に平行に配置されている場合は、前述のように配置された要素の形態が消点に向かって収束しないため、透視図としての空間表現はさらに曖昧になる。こういった手法によってモンタージュ A の透視図は、各要素の位置が把握できる透視図としての奥行き感ではなく、描かれた空間内におけるモンタージュされた要素の浮遊感が表現されていると考えられる。

窓から見える外部空間はハンドドローイングで表現されたモンタージュ 14 点と、写真で表現されたモンタージュ 11 点が存在する。ハンドドローイングで表現されている外部は内部空間の延長のように表現された近景のみであり、一方、写真で表現されている空間は中景・遠景のみである。窓際の若干の犬走り空間を除き、外部空間がハンドドローイングと写真の両方によって表現されることは無い。また、ハンドドローイングにおいて遠景が表現されることもない。外部空間を表現する写真は、表 6 のように 11 点のうち 2 点は透視図によって描き出される空間の奥行きを意図的に無視した水盤や緑の断片写真である(図 7)。また残りの風景写真 9 点のうち、計画された敷地からの風景またはそれに類する風景が選択されているものはわずかに 3 点のみであり、それ以外は敷地条件とは無関係な雄大な自然などの視覚的なスペクタクル(図 10)が配置されている。

このようなモンタージュ A の特質、モンタージュされた素材の厚みを表現せず、浮遊感を生み出す配置手法、そして、外部空間として表現されたイメージにおける実際の外部状況を反映していないイメージの選択などから、モンタージュ A は実際に作られる内部空間が実際にどのように見えるかという絵画としての建築空間の視覚的再現を意図したものではなく、むしろフリースタANDINGウォールとして配置された内部の要素の可動性や、内部空間と外部空間の不連続性といった理念的な側面を表現していると考えられる。

図 9 : コートハウス計画

図 10 : レザー邸

表 6 : 内観モニタージュ A における外部風景の写真的特質

プロジェクト	描かれた空間の位置	消点	外部空間の位置	外部表現			内部と風景
				種別	位置	表現	
Resor House	2階 (川の上)	1	奥	写真	中景	実際の敷地からの風景	○
		1	奥	写真	遠景	雄大な山並み	×
		1*	奥	写真	遠景	雄大な山並み	×
Museum for a Small City	1階	1*	奥	写真	遠景	美しい岩壁	×
Apartment Building, 860/880 Lake Shore Drive	不特定の 高層階	1	奥～右手	写真	遠景	シカゴの街並	○
Ron Bacardi y Compania, S.A. Administration Building	1階	1	奥	写真	遠景	田園地帯	○
		1	奥	写真	断片	緑の断片	××
George Schaefer Museum	1階	1	奥	写真	遠景	湖畔の鳥瞰	×
		1	奥	写真	遠景	街並みの鳥瞰	×
		1	奥～右手	写真	遠景	湖畔の街並み鳥瞰	×

外部イメージ 内部と風景の整合性

○: 外部イメージと内部空間が透視図法的に整合性を有している

×: 内部空間の位置からみて外部イメージと内部空間が透視図法的に立地上ありえない風景が選択されている

××: 外部イメージが透視図法の空間性と異なる空間性を有している

ii) 内観モニタージュ B

内観モニタージュ B の二消点透視図法のモニタージュ 3 点は二消点透視図特有の空間的広がりのある表現となっている。一消点透視図法のニューナショナルギャラリーは天井がその空間的枠組、奥行き感を強く表現しており、要素はシンメトリに配置され、壁は厚みがあるものとして表現されている(図 8)。背景となる建築の写真が生み出す透視図法上の空間的枠組みが画面を支配しており、内部に配置される素材も背景の空間的枠組みに則って配置されている。また素材の表面のテクスチャーが背景と大きく異ならないため、その画面の統一性は維持され、その表現も基本的には再現的なものである。これらのことから、モニタージュ B の表現の中心が空間を成立させている建築本体の持つ、力強さや巨大さといった感覚的な側面を表現していることが示唆される。

(2) 内観透視図のドイツ期とアメリカ期の比較

アメリカ期のミースの内部空間は 7 プロジェクトのために 25 点が内観モニタージュ A によって、3 プロジェクトのために 5 点が内観モニタージュ B によって、3 プロジェクトのために 3 点が単線によるハンドドローイング(図 12)(構造体の骨組み表現などを除く)による透視図として表現されている。一方ドイツ期では内観モニタージュは作成されず、内部空間は 11 点の単線によるハンドドローイング(図 11)と 3 点の建築要素の素材感を表現したハンドドローイングによる透視図で表現されている。表 5 のようにハンドドローイングにおいても、ドイツ期とアメリカ期はその表現が変化していることから、ここでは、内観モニタージュ、ハンドドローイングを含めた内観透視図の表現についてドイツ期とアメリカ期を比較する。

ドイツ期の単線によるハンドドローイングは、素材の質感などを表現することなく、単線による輪郭線だけで空間的広がりを表現しており(図 11)、素材感を表現したハンドドローイングは素材の質感をコンテなどで表現し、その面的な表現によって空間的広がりを

表現している。アメリカ期において、内部空間を単線で透視図として描いたものはモニタージュ A の背景とハンドドローイングによる内観透視図であるが、モニタージュ A においても、前述のとおり外部がハンドドローイングで表現されたモニタージュと、写真で表現されたモニタージュが存在し、1940 年前後においては、両方のモニタージュが作成されているが、1940 年代後半以降は、作成された 7 点の内観モニタージュ A のうち、外部がハンドドローイングで表現されたモニタージュは 1 点のみである。一方、アメリカ期のハンドドローイングは、単線での表現ながら、鉄骨の仕口やパネルの割付などを詳細に表現しており、モニタージュ A の背景とは異なる表現となっている(図 12)。単線ドローイングだけを取り出した場合、輪郭線によって空間を表現している点などドイツ期のハンドドローイングと内観モニタージュ A はその表現において類似しているが、前述のように作品全体としてみた場合、その空間表現は必ずしも一致しない。このため、ドイツ期のハンドドローイングがモニタージュに発展する形でモニタージュ A が生み出され、その手法を特化させるなかで、独自の表現手法を獲得したと考えられる。また、モニタージュ A の表現の特化と同時に、ハンドドローイングはより詳細を表現する手法へと特化していたと考えられる。一方、ドイツ期に見られた要素の質感をコンテなどで表現したハンドドローイングは類似する手法をアメリカ期では確認できなかった。アメリカ期に作成された内観透視図のうち、モニタージュ B では、写真によって空間を構成する要素の質感は表現されている。

(3) 考察: 空間表現としての内観モニタージュ

表 4、5 のように、内観モニタージュ A が作成されたプロジェクトの大半がその空間的特質として流動的空間、単一空間のいずれかを有している。ミースの空間特性が流動的空間から単一空間へと移行するのは 1940 年代といわれており、モニタージュにおいてもこのことは反映されている。また、内観モニタージュ A の表現上の特質として、外部表現がハンドドローイングで描かれているか、写真で描かれているかという二つの特質が存在するが、この特質はほぼ、空間的特質と一致する。つまり、流動的空間を描いたモニタージュは外部がハンドドローイングで表現されており、単一空間を描いたモニタージュでは外部は写真で表現されている。特に、流動的空間と単一空間の空間特質の転換期のプロジェクトとされる³²小都市の美術館が、ハンドドローイングで外部を描かれたモニタージュと写真によって外部が表現されたモニタージュの両方を有していることは、空間的特質とモニタージュ表現の関係性を示唆している。

前節において、内観モニタージュ A とその表現方法において連続性を有すると指摘したドイツ期の単線によるハンドドローイングの大半も流動的空間の特質を有するプロジェクトのために作成されている。内観モニタージュ A のハンドドローイングによって表現された外部空間はドイツ期のハンドドローイングの外部表現とは異なり、敷地外部の環境は描かれていないが、内外の連続性は維持されている。一方、単一空間の特質を有するプロジェクトのモニタージュは全て外部が写真で表現されており、前述のように、そのイメージの大半が実際の周辺環境を反映したものではない。このことから、モニタージュ表現に限定した場合、その描かれる空間が流動的空間から単一空間へと移行するのと連動するように外部空間の表現方法が変化したといえることができる。一方、内観モニタージュ B が作成さ

図 11 : フッペ邸の内観透視図

図 12 : I.I.T. 図書館の内観透視図

れたプロジェクトはすべてメガストラクチャーによって単一空間を表現しており、メガストラクチャーの巨大さや、力強さが再現的に表現されている。しかし、これらのモンタージュにおいても外部空間は表現されていない（図8）。

6章 むすび

今まで単に一括して捉えられていたミースのモンタージュをその表現手法によって分類を行い、モンタージュの表現の特質に応じて、その表現される内容が異なることが明らかになったと考えられる。

ミースのモンタージュは、ドイツ期は主に外観モンタージュが作成され、アメリカ期では、主に内観モンタージュが作成されている。つまり、モンタージュの表現において、ドイツ期の外観モンタージュでは街並みという周辺環境との関係性を重視したモンタージュが作成されていたのに対して、アメリカ期では、外観モンタージュが1点しか作成されず、その表現は周辺環境との関係よりも建築単体にその表現の中心が移行している。一方、アメリカ期の大半を占める内観モンタージュにおいては、内部から見える外部空間は、内部空間の延長としての中庭や前庭にとどまり、その外部、敷地外の環境は描かれないう、実際の周辺環境とは異なるイメージの写真が選択されている。このことからアメリカ期のモンタージュはドイツ期と比べて、周辺環境との関係性を重視していないか、もしくは周辺環境から切り離れた表現を行っていると考え、内部空間の特質を表現していると考えられる。

次稿では、それぞれのモンタージュの特質を踏まえて、ミースのモンタージュにおける空間表現について内外空間の表現という観点からより踏み込んだ考察を行う。

注

- ① デヴィッド・スペース、(平野哲行訳)「ミース・ファン・デル・ローエ」鹿島出版会 1988 年、p.156
- ② 1976 年にマンフレッド・タフラーとフランシス・ダル・コーの「Modern Architecture」によって提示されたミースの空間構成法のメタファーとしてモンタージュを考えると、この視点はその代表的なものである。(Manfredo Tafuri / Francesco Dal Co, (Robert Erich Wolf 訳)『Modern Architecture I』Rizzoli, 1986, p.136)
- ③ ミースのモンタージュに言及した既往研究として以下の論文を参照した。佐野潤一「フリードリッヒ街オフィスビル案のバースの謎について ミース研究 15」日本建築学会大会学術講演梗概集 1997 年 9 月、p.403
杉本俊多、永田周太郎、「ミース・ファン・デル・ローエの 1920 年代高層建築案 CG 再表現を通しての研究」日本建築学会計画系論文集、第 493 号 p.223
南部さゆり、石田壽一、「ミースの作品における空間の重層的構成について」日本建築学会大会学術講演梗概集、2001 年 9 月 p.579
國分大輔、松本祥昌、田路貴浩、「ミース・ファン・デル・ローエの透視図とモンタージュについて (1) <主題>の分析」日本建築学会大会学術講演梗概集 2004 年 8 月、p.775
- ④ Andres Lepik, 「Mies and Photomontage, 1910-38」『Mies in Berlin』The Museum of Modern Art, 2001, p.324-329
- ⑤ 加えてレビックは、ミースのモンタージュのうち、透視図法によって作成されているものについては完成イメージの再現的なものと認識している。本研究においては、ミースの透視図モンタージュが建築空間の絵画的再現を意図したものであるかを一つの分析点としており、この点においても、レビックの研究と補完の関係にあると考える。
- ⑥ 研究者によってモンタージュの呼び方は多様である。John Zukowsky のように、外観、鳥瞰のドローイングをフォトモンタージュ、内観をコラージュと使い分けている研究者がいる一方で、Franz Schulze のように二つに論文の間で同じドローイングを別の呼び方で用いている例も見出せる。研究者のほとんどが、モンタージュの呼び方について特に説明的なことを述べていないが、Andres Lepik は「Mies and Photomontage」の脚注のなかで、ミースの写真を組み込んだドローイングをすべてモンタージュと呼ぶ理由を、コラージュが画面の統一性を破壊するのに対して、モンタージュが統一された画面の形式を保持するためとしている。
- ⑦ 表現手法として明確にほかの表現と区別しうるモンタージュと異なり透視図とスケッチの境界は不明瞭であり、選定の基準としては対外的な発表を前提として描かれていると判断できるかどうかを選定基準としたが、この基準によって厳密にドローイングとスケッチを区別できないことは言うまでもない。それゆえ、これらはあくまでモンタージュのプレゼンテーション手法としての特性を理解するための参考資料として位置付けている。
- ⑧ モンタージュは以下の資料から採択した。
①Arthur Drexler, 『Ludwig Mies van der Rohe』George Braziller, Inc. 1960
②Philip C. Johnson 『Mies van der Rohe』The Museum of Modern Art, 1978 (Third edition)
③Peter Carter, 『Mies van der Rohe at work』Phaidon, 1974
④Wolf Tegethoff, 『Mies van der Rohe The Villas and Country Houses』The Museum of Modern Art, 1985
⑤Franz Schulze, 『Mies van der Rohe A Critical Biography』The University of Chicago Press, 1985
⑥Mies van der Rohe Archive vol.1-20, The Museum of Modern Art, 1992
⑦Jean-Louis Cohnen, 『Mies van der Rohe』, Hazan, 1994
⑧Maritz Vandenberg, 『New National Gallery, Berlin』Phaidon, 1998
⑨Terrence Riley and Barry Bergdoll ed., 『Mies in Berlin』, The Museum of Modern Art, 2001
⑩Phyllis Lambert ed. 『Mies in America』Canadian Centre for Architecture, Whitney Museum, Harry N. Abrams, 2001

- ⑪八束はじめ『ミースという神話 ユニバーサルスペースの起源』彰国社, 2001
- ⑫調査対象から抽出したモンタージュは 57 点。このうち、ベルリン建築展のための内観透視図のモンタージュは展示会の会場設営を描いたものであり、明らかにほかのモンタージュとは様相をことにするため対象から除外した。また、実際の敷地に原寸大の立面模型を設けたクレーラー・ミュラー邸の写真はモンタージュ的ではあるが、ドローイングとしてのモンタージュとは手法的に異なるものであるため、本研究では対象とはしない。
- ⑬モンタージュの作成年についてはプロジェクトの計画年を採用しているが、後年にモンタージュが作成されたという指摘があるものについてはそれを採用した。1930 年代のコートハウス計画はドローイングの作成時期とプロジェクト計画時期の間に時間的ズレが存在する事がわかっており、この場合はモンタージュが作成された時期を制作年としている(Terrence Riley, 「From Bauhaus to Court-House」from 『Mies in Berlin』p.331)
- ⑭ミースは、1920 年の第一回国際ダダフェアのオープニングに参加しており、このことは彼のベルリンのダダコミュニティとのつながりを示唆している。特にハンナ・ヘーヒ、ラウル・ハウスマン、クルト・シュビッターズとは友好的な関係にあったとされている。(Franz Schulze, 前掲書, p.104)
- ⑮たとえば、八束はじめ氏はミースのモンタージュ手法の愛好をダダからの影響に起因しているとしている(八束はじめ, 前掲書, p.146)
- ⑯レビックによれば、1900 年ごろには、Friedrich von Thiersch をはじめとする建築家たちはコンペティションの提出物として、ドローイングを実際の予定地の写真に重ね合わせるということを始め、これはこれらのイメージを標準的な透視図よりリアルで説得力のあるものにした。その後、専門誌と一般大衆の両方に対して建築を発表するために写真を利用することがますます幅広く行われるようになっている。(レビック, 前掲書, p.324)
- ⑰ドーン・エイズ、岩本憲児訳『フォトモンタージュ 操作と創造』フィルムアート社, 2000 年、p.14
- ⑱ジークフリート・ギーディオンは、「空間・時間・建築」において前者をダダイスト、ロニヤ構成主義者によって生み出されたモンタージュ特有の非透視図法的な表現とし、ルネッサンス以降連続する遠近法と断絶した、「対象を相対的に眺め、どの観点も絶対的な権威を持っていない」表現と見ている。(Sigfried Giedion, 太田實訳『空間・時間・建築』丸善株式会社 1974 年 p.511)
- ⑲たとえば、シュツットガルトのバンクビルディングの計画では、ほかの建築家によるミースのモンタージュと同じアングルのモンタージュが確認されている。
- ⑳Adrian Sudhalter 「Bismarck Monument Project, Bingen, 1910」『Mies in Berlin』p.158
- ㉑ただし、1960 年のドレクスラーによるミースの作品集などではこのモンタージュやドローイングは紹介されている。
- ㉒佐野潤一氏は平面図、モンタージュ、ドローイングの分析によりハンドドローイングが設計競技案ではないとしている。(佐野潤一 前掲書) また、レビックはこれらのモンタージュが「われわれの知りうる限り」1921 年ミースが提出した図面類には含まれておらず、これらは、展示や出版のために後日作成された可能性を指摘している。
- ㉓ハンドドローイングのイメージは 1926 年 3 月の『G』の 4 号に引用されている。
- ㉔Arthur Korn に関する記述は Werner Oechslin の「Not from an aestheticizing, but from a general cultural point of view」Mies' s Steady Resistance to Formalism and Determinism: A Plea for Value-Criteria in Architecture」(Mies in America, p.38) より引用した。
- ㉕Terrence Riley and Barry Bergdoll ed., 『Mies in Berlin』, The Museum of Modern Art, 2001, p.249 の図面注より
- ㉖Lepik, 前掲書 p.327,
- ㉗Detlef Martins 「Architectures of Becoming: Mies van der Rohe and the Avant-Garde」『Mies in Berlin』The Museum of Modern Art, 2001, p.107
- ㉘コンサートホールのモンタージュは I. I. T. の学生であったポール・カンパニャ(Paul Campagna) が 1941 年に作成した卒業設計のためのモンタージュがベースとなっており、以後、ミースは同様の課題を学生に課したといわれている。また小都市の美術館のモンタージュは、やはり 1941 年、当時 I. I. T. の学生であったジョージ・ダンフォース(George Danforth) の卒業設計を発展させたものであった。これらのモンタージュは 1947 年のニューヨーク近代美術館のミース展において、ファンズワース邸やカンタードライブの模型とともに展示されている。Phyllis Lambert 「Mies Immersion」『Mies in America』p.423-429
- ㉙Peter Carter の Mies van der Rohe at Work の作品リストをベースとして、Mies van der Rohe Archive をリストを補充するものとして使用した。また、インテリアおよび、展覧会の設置は除外した。
- ㉚佐野潤一 前掲書、レビック, 前掲書, p.326
- ㉛このプロジェクトは作品年表には掲載されているものの、作品集に掲載されていないのはもちろん、シュツツの伝記においても一切言及されていない
- ㉜モンタージュ・ドローイングが作成されたプロジェクトの空間特質を表現する言葉を「Mies van der Rohe Archive vol.1-20」, The Museum of Modern Art, 1992『プロジェクトのコメントは Franz Schulze』
- ㉝『評伝ミース・ファン・デル・ローエ』Franz Schulze 澤村明訳 鹿島出版会 1987 年から抽出した。どのプロジェクトがどの空間の特質を有しているかは、上記文献の各プロジェクトのコメントから抽出した。下表はそれぞれのプロジェクトについての空間特質が言及されている部分をリスト化したもの。

プロジェクト名	制作年	流動的空間・流れる空間		単一空間(unitary space)		ユニバーサルスペース(普遍的空間)	
		Mies van der Rohe Archive (Franz Schulze)	評伝ミース・ファン・デル・ローエ (Franz Schulze)	Mies van der Rohe Archive (Franz Schulze)	評伝ミース・ファン・デル・ローエ (Franz Schulze)	Mies van der Rohe Archive (Franz Schulze)	評伝ミース・ファン・デル・ローエ (Franz Schulze)
German Pavilion Barcelona	1928-29		p.157				
Luxemburg House	1928-30	pp.1, 2-p.262					
Krefeld Golf Club	1930						
War Memorial	1930						
Henke House Addition	1930						
Gerike House	1932	Vol. 3-p.200					
German Pavilion International Exposition, Brussels	1934	Vol. 4-p.84					
Hubbe House and Hubbe-related studies	1935		p.104				
Court Houses	1930s	Vol. 4-p.62	p.190				
Resor House	1937-38		Vol. 7-p.2				
Museum for a Small City	1942						
Concert Hall	1942			p.220		Vol. 13-p.76	
III Library and Administration Building	1944-45						
III Field House	1945						
Gymnasium, Natatorium							
Apartment Building, 860/880 Lake Shore Drive	1948-51						
Convention Hall	1952-54		Vol. 18-p.22	p.220			
Ron Bazar & Compania, S.A. Administration Building	1957-60			p.302			
George Schaefer Museum	1980-83			p.230			
New National Gallery	1982-88			p.308			

- ㉞窓からの風景と描かれた透視図の空間との関係などを厳密に見れば、後述するように透視図法的に矛盾したモンタージュは 7 点となる
- ㉟日本建築学会編、第 3 版 コンパクト建築設計資料集成、p.22
- ㊱画面に異なるテクスチャーを持った素材を配置することで、描き出された画面の空間的統一性を曖昧にする手法はキュビズムなどに顕著な方法であるが、ミースのモンタージュにおいては、モンタージュされた素材は断片的でありながらも、透視図を破壊させるような形では配置されていない。そのため、ミースのモンタージュにおける空間的統一性の曖昧化はキュビズムやダダのモンタージュとは、その質や程度が異なるものであるといえるであろう。
- ㊲Schulze, 前掲書 p.230

(2005年11月10日原稿受理、2006年5月22日採用決定)